

労働と人間（I）

——マルクス『経済学・哲学草稿』（1844年）の検討を中心に——

高木 彰

はじめに

現代経済の基本的傾向の一つは、ME化の急速な展開にある。生産と流通という経済活動の中心的領域におけるコンピューターの導入が量的にも、質的にもその速度が増大し、それによって経済社会の分野においても重大な影響が生じるに至っている。その中の一つに従来の生産的労働のあり方が大きく変化したことがある。そのような変化によって労働とは何か、人間にとって労働はどのような意味を持っているのかということ、即ち労働の人間的本性という基本的な問題が改めて提起されにいたっているのである。技術の急速な発展、或は質的变化が労働内容を大きく変えつつあるのであるが、その場合、そもそも労働の生き甲斐とは何か、技術進歩によって労働者の熟練は如何なる影響を受けるのか、更にはそのような変化、ME化の展開が人間の全面発達と如何に関わるのかが問われることになるのである。

戸木田嘉久氏は、そのように急速に展開するME化が労働者階級を「変質」させるか、という主題のもとで、「日本の労働者階級の構成と状態」の変化を具体的に分析されている。然るに、そこで示された結論は、「『科学技術革命』＝ME革命によっては、現代資本主義も、従って又労働者階級の構成と状態についても、『根本的な変化』・『変質』は認められない」（〔28〕213頁）ということである。その際、現代資本主義が本質的に変化していないとされること自体

がその所論の全体を規定する基本的な問題である。しかし、それは別個に問題にすることにして、ここでは、次のように指摘されていることに本稿の問題展開の糸口を見出すことにする。

「我々の具体的分析では、現代の労働者階級は依然として資本の『人間的搾取材料』であり、資本の蓄積はプロレタリアートの増殖であり、貧困の蓄積である、という命題も、依然として生きていることを示している。それは、労働者階級の構成において、いかにいわゆる『ホワイトカラー』層の比重が増大し、『豊かな生活』といった現象が一面でみられようとも、ME革命のもとで現代の労働者階級は、本質的にはなんら『変質』していない、ということである」(〔28〕215頁)。

ここで、結論として、労働者階級が資本の「人間的搾取材料」であるとされていることは、ある意味では当然のことである。資本の支配する経済体制の下では、労働者階級は資本によって全面的に搾取されているのであり、資本主義経済の発展とは労働者階級への支配の質的、量的強化であるということであるが、それはいわば経済理論の結論を確認したに留まるものでしかないのである。日本経済も資本主義の経済体制であることを追認するということである。しかし、そこからは我が国の労働者階級の進むべき方向といったものが具体的に示され得ないものといえよう。資本主義の下で労働者階級の本質的な「変質」が惹起されるということは、それは最早資本主義それ自体の否定でしかない。資本主義を否定することにおいてのみ労働者の搾取からの解放が可能であることがどれだけ強調されたとしても、現在、資本の支配と従属のもとにある労働者の未来について何らかの展望を示すことにはならないのである。

しかし、ここではそのことを問題にしようとするのではない。労働者階級の「変質」の議論において論じられなかった問題の一つに、労働の質的变化、労働そのものの本質との関連ということがあるのである。資本主義の発展と展開は、労働者階級への搾取強化の過程であることは言うまでもないことである。しかし、その一面のみが強調されることになれば、例えば、資本主義の下で働くことに生き甲斐を求めるといふようなことはおよそ無意味であり、そこでの

あらゆる人間的な営みの追及も資本の「合理化」に結び付くものとされてしまうのである。しかし、資本主義の下での労働は「疎外された労働」であるとはいえ、果たしてそのような否定的な意味しか持ちえないのであろうか、ということである。資本主義の飛躍的な発展と拡大をもたらしたのは資本であるとはいえ、それは多数の労働者の積極的労働に支えられてのことではなかったのかということ、そのようなことが経済の質的変化が惹起されている現在再検討されるべきではないだろうか、ということである。

ところで、最近の労働問題の分野の新たな論点として、「労働の人間化」（＝QWL）という問題がある。「労働の人間化」とは、広義には人間的欲求や人間的価値を労働において実現しようとすることである。それは確かに企業の主導によるものであり、「組織や職務を再編し、労働者の満足感と生産性を両方もも上げよう」（[29] 59頁）とするためのものである。その意味では現代資本主義の下での「合理化」の一契機であることに変わりはない。資本制生産の発展とは資本の支配の深化の過程であり、労働の資本の下への従属と労働者の精神的・肉体的零落は絶えずその装いを変えつつ再生産されてきたのであり、「労働の人間化」の追及自体もそのようなものの一つの現実的姿であることは確かである。

しかし、そこで問われるべきことの一つは、資本が労働において労働者の満足感といったもの、労働それ自体の意義を問題にせざるをえないということのもつ意義である。日常的な労働の現場において人間的な側面が強調されるようになってきているのであるが、そのことのもつ意味を如何に把握するかということである。搾取の一面的強化によっては生産性の上昇に限界のあることをもっとも端的に示したのがテラー・システムであり、フォード・システムである。それは「科学的管理法」の名の下で、労働の機械的作業化、頭の労働と手の労働の分離を徹底しようとするものであり、その根底に横たわる観念は、労働者を機械の付属品とみなし、「資本家への労働者の絶望的な従属」（Kap. 1. 444）を完成させるという資本の本性の具体化そのものに他ならないということにおいてそうなのである。しかし、そのような方法には限界のあることがME化

の進展と共に明確になってきているのが現状なのである。

「労働の人間化」の要請が利潤原理を媒介としたものであることは確かである。それは人間を操作されうるものとして把握し、そのような人間の完成を目指すものであり、「人間の動物化」を結果的にはもたらす可能性を含むものであることも確かである。極端に細分化され、定型化された労働が労働者の労働意欲を喪失させ、モラルを低下させているのであり、それ故に生産性上昇に大きな障害が生じているのであるが、そのことの故に、労働における「人間性の回復」が問題にされざるをえない状況が生じているのである。「労働の人間化」も所詮は、そのような現状の下での企業側からの問題提起であることは確かである。

しかし、それにも関わらず、資本が人間における労働の意義を確認し、働くことに生き甲斐を持ちうることを問題にせざるをえないということ、そのことが重要なのである。「労働の人間化」においては、労働における人間的価値の実現が如何にして可能かとか、或は労働能力の発揮と労働者の人間としての欲求、価値観の実現は如何に適合するかということが問題にされているのである。労働に際して個人の能動性とか自主性とかといったものに依拠しないでは企業活動そのものが成立しなくなりつつあるという状況が生まれているということである。「労働の人間化」は単に労務管理の功妙化として否定されえない側面をもつのである。それは資本主義的労務管理の領域においてはじめて起こった労働の人間にとっての意味を労働の構造にまで掘り下げようとする反省の萌芽として位置付けることができるものである。そのことは本質的には労働者も人間であるということに還元されるものであるとはいえ、労働と人間との関わりにおいてその点を再確認しておくことは、現代経済におけるME化の問題を論ずる際には不可欠である。

本稿は、以上のような問題意識のもとで始められた研究のいわば序論的部分である。人間にとって労働とは何を意味するのかという問題は、詮じつめれば初期マルクスにまで還帰せざるをえないということである。労働を「人間の本質」として捉えることをヘーゲルから学びながら、しかし、そのヘーゲルを、

そしてフォィエルバッハを超えて新しい科学の創造を積極的に意図していた段階のマルクスこそがその初期の営みにほかならないのである。勿論、『資本論』のマルクスが初期のマルクスと相違するということではない。しかし、少なくとも労働が「人間の本質」であることを基軸として、その持つ意義を徹底して検討していたことにおいて、『経済学・哲学草稿』は、『資本論』の前提とされねばならないのである。『資本論』の思想的前提が何であり、更には、経済学の研究においてどのような課題がまずもって設定されねばならないかを明確にする点においても初期マルクスの検討は必要とされるのである。

しかし、何故、今、初期マルクスなのか、ということはそれ自体としても意味がある。社会主義経済の危機的状況が惹起されているという状況のもとであるからこそ、『資本論』が目指した近代社会の経済的運動法則解明の根底にあるものが何であるのかが検討されねばならないのであり、更には『資本論』の豊かな思想的背景が、今、改めて問われねばならないのである。

（Ⅰ）労働と人間の生成

《労働と人間》

人間は「何故働くのか」、或は人間において労働は如何なる意義をもちうるのかという最も素朴で、しかも最も基本的な問題を考えるに際しては、人間が人間として生成する上で労働が果たした役割を明確にしておくことは極めて重要である。マルクスは、人間と動物との区別は人間が「生活手段の生産」＝労働を開始したことにあるとしているが、それは人間生活の中心点が労働という活動形式にあるということである。人間がその労働を通して如何に創造されてきたかについての簡単な歴史的経過は、エンゲルスによって明らかにされている。人間生成の歴史的過程を問題にすることは生物的生命と人間的社会とにおける論理的連続性を前提にするということでもある。ここではエンゲルスの展開を通して、人間そのものの生成における労働の役割を明確にしておこう。

エンゲルスは、労働は、自然と並んで「あらゆる富の源泉である」が、しかしそれだけに留まらず、「なお限りなくそれ以上のもの」であり、「人間生活全体の第一の基本条件であり、しかもある意味では、労働が人間そのものを創造したのだ、といわなければならないほどに基本的な条件なのである」([33] 482頁)としている。この「労働が人間そのものを創造した」ということは、マルクスの指摘した、労働は「人間の自己産出過程」([15] 216頁)であるということと言い換えたものである。

労働が「人間生活全体の第一の基本条件」であるということは、二つの意味を含んでいる。第一は、人間が人間として生存しうるためには取り敢えず生活資料を獲得しなければならないのであり、労働はそのために従わざるをえない自然必然的な活動であるということである。労働は人間が多種多様な自然的欲求を充足するために必要な手段としての活動である。そこでは先ず第一に人間が衣食住を満たすために行う物質的生産の活動において労働が把握されているのである。その意味ではまず人間が労働を行うというそのことがそもそもの出発点なのである。

しかし、エンゲルスは、労働の意義はそのような生存の手段としての側面に限られるものではなく、第二に「労働が人間そのものを創造する」とされる側面をも含むものであるとしているのである。労働を富の源泉としてのみ把握し、生活のための手段として、「ただ稼ぐ活動という姿」([15] 40頁)でのみ規定したのは古典派経済学にはかならなかったのである。古典派経済学は、労働の目的が単なる富の増大である限りにおいては、「労働そのものが、有害で、禍に満ちている」([15] 39頁)ということを知らないうちに展開していたのである。それ故、労働を富の源泉としてのみ把握することでは不十分であり、「それ以上のもの」として、その意味が問われることになるのである。労働は人間にとっての生命維持のために必要とされる活動であることは、確かであるとしても、その活動が人間に特有な労働であることの意味が問われているのである。エンゲルスは、それを「人間そのものの創造」として把握したのである。人間は労働そのものによって歴史的に形成されたということである。

その際、エンゲルスは労働それ自体については特別に規定を与えてはいない。そこでは労働は自然の富への転換活動として単純に、その意味では人間の活動そのものとして把握されているのである。労働が如何に人間を創造したかを問題にすることによって労働の人間的本性を明らかにしようとしているのである。それ故、ここで問題にされねばならないのは、この「労働が人間そのものを創造する」とされていることの人類史における意義である。そのような問題は従来の経済学が切り捨ててきた部分でもある。経済学においては人間労働は単に労働能力の提供として、更には収入を得る活動としてのみ問題にされてきたのであるが、その本質的規定の検討が経済学の側からも必要とされているのである。

《労働と手》

まずエンゲルスは、「ヒトニザル」或は「人類祖型」（[39] 71頁）とされるものにおいて「手の使用」が歩行機能から解放され、手の運動が自由に行えるようになったことを取り上げ、それは、「人間への決定的な一歩」（[33] 482頁）であるとす。「何千年もの長い苦闘の末に足から手への分化、直立歩行が遂に確立されたとき、まさにこのとき人間は猿からわかれ」（[33] 353頁）たというのである。

直立歩行によって手が自由に使えるようになるのであるが、それは同時に手に別途の諸活動を受け持たすことができるようになるということである。自由に使えるようになった手は、様々な作業に適応させられることによって、人間の手として生成したのである。手が自由に使えるようになった「まさにこのとき有節言語の発展と脳の力強い発達とのための基礎がおかれたのであって、この脳の発達が以後人間と猿との間の溝を越え難いものにしてしま」（同前）だったのである。エンゲルスは、「手は労働の器官であるばかりは、手は労働がつくりだした産物でもある」（[33] 483頁）としている。労働を通して手は人間の手に生成したのである。

人間における直立歩行と手を使うという行動上の変化が、人間の頭脳と他の

動物の頭脳の間の変化をもたらしたのであるが、永井潔氏は、それは「外部行動上の変化が、進化過程にフィードバックしたと見るべきであろう」([40] 104頁)とされている。永井氏は、「肉体の内部構造の違いによるものではなくて、その肉体の外部的行動の変化が意識の変化の端緒なのである。そして外的手段を媒介にする行動の間接化が変化を決定的にする」([40] 105頁)とされ、動物的行動の人間の労働への転化ということも、労働から派生した人間の意識の生成において説明されるべきであるとされるのである。人間の直立歩行という行動上の変化が人間に固有な理性、意識を形成したのであり、それ故、「意識的な生活活動が人間を動物的生活活動から直接に区別する」([15] 106頁)ものとされるのである。

かくて、労働が人間を創造したということは、第一に労働を通して身体の諸器官が発達したということである。手が自由になり、労働が行われることによって、手そのものが精巧なものとなり、その手の使用を通して感覚諸器官の発達もたらされたのである。

《労働と言語》

次いで、エンゲルスは、労働を起源とする言語の発生について指摘している。労働の発達は、相互の援助、共同で行う協働の機会をより頻繁にし、社会の成員(生成しつつあった人間)を一層緊密に結び付け、会話が必要となり、そこから言語が生まれたということである。「言語が労働のなかから、又労働とともに生まれた」([33] 485頁)のである。労働の発達によって集団的生活における共同性が深まり、社会的性格がより濃くなったことが言語の発生をもたらしたということである。マルクスの指摘するように言語が「人間の社会的所産」(Kap. 180)であるとすれば、「言語もはじめはまず労働手段としてこそ形成された」([40] 107頁)とすることができる。

かくて、エンゲルスは、「はじめに労働、その後に、そしてこんどは労働とともに言語—この二つが最も本質的な推進力」([33] 486頁)となって、脳が完全な人間の脳へと移行し、人間は人間として生成したとしている。ここで注意

したいのは、人間が生成するに際して、その生存の手段としての活動が基本的であるとしても、そこでは人間が知能と適応能力とにおいて他の動物よりはるかに優れていたということである。「ヒトニザル」とされるものが人間として生成する可能性をもっていたが故に、その生存活動、労働によって現実的に人間へと生成が可能であったということである。

人間の脳の発達には、その脳の最も直接的な道具である感覚諸器官の発達を促し、それによって意識と抽象及び推理の能力の発達をもたらしたのであるが、それは「労働と言語とにこんどは反作用して、この両者に絶えず新しい刺激を与えてそれらのより一層の発達を促」（[33] 486頁）すことになったのである。しかし、ここで注意したいのは、労働と言語の発達は、人間が人間として生成してしまえばそれで終わりを告げるというものではないということである。エンゲルスの指摘するように言語と労働の「発達はその後、民族や時代の違いによってその度合いや方向は違っていたにしても、又時には局地的、一時的な退行によって中断されたことさえあったが、全体としては力強く進んでいった」（[33] 486頁）のである。感覚器官、精神的力能、実践的感覚といったものは、労働や言語の作用と蓄積を通して形成されてきたのであり、それらは自然史・社会史の産物にほかならないのである。マルクスは、その点を「五感の形成はこれまでの世界史全体の労作である」（[15] 154頁）としたのである。

その際、エンゲルスは、この労働と言語の「発達を一方では強力的に推進し、他方では特定の方向に方向づけていったものは、出来上がった人間の登場とともに新たに加わってきた一要素—社会であった」（[33] 486頁）としている。勿論、エンゲルスは、ここで忽然と「社会」が出現したとしているわけではない。動物的な群居生活が人間的な「社会」としての生活に転化していくのであるが、その過程は当然にも動物的行動の人的労働への転化と重なり合っているものであり、その意味では両者は「統一的な一つの運動過程の二つの側面」（[40] 106頁）とされるのである。社会は労働に媒介されることによって人間社会として生成するのである。

新たに形成された社会によって今度は人間自身が作られることになる。社会

が人間の歴史に新たに加わることによって、労働そのものが社会によって媒介されることになり、人間労働として生成するのであり、従って人間は、「出来上がった人間」として急速に成長することになるのである。動物の単なる集団とは異なる「社会」としての「出来上がった人間」の集団において労働と言語はより一層の発展を遂げることになる。

尾関周二氏は、「出来上がった人間」における「本来の労働」は、「原初的労働」とは区別されねばならないとされたうえで、その「本来の労働」は「言語的意識を前提として成立する」(〔4〕36頁)のであり、「出来上がった人間」においては、労働の一元的作用ではなく、労働と言語の相互作用として、両者の「相互の人間化における不可決の依存関係」(〔4〕176頁)として把握されねばならないとされている。

マルクスは、「社会自身が人間を人間として生産する丁度そのように社会は人間によって生産されている」(〔15〕148頁)としている。人間と社会は、作りつつ、作られるという相互に規定的な関係にあるのである。社会それ自体は人間の生活行動＝労働によって形成されるものであるが、エンゲルスは、その社会が如何に生み出されるかということはいわば前提されたものとしているのであり、ここではその結果のみを「人類史の新たな一要素」としてもちだしてきたのである。

次いで、エンゲルスは、「猿の群れと人間社会とを分かち際立った区別として我々が再度そこに見出すもの」は、「労働」(〔33〕486頁)であるとしている。社会によって労働のより一層の発展がもたらされるのであるが、その社会そのものが労働の媒介によって単なる集団から質的に転換したものにほかならないのである。労働によって社会が形成され、人間をしてその社会の構成員たらしめる点において、従って、人間の活動の社会的性格の生成において第二の点としての人間の創造を言うことができるのである。確かに「人間は本源的に社会的、共同的存在であり、従って、人間のあらゆる活動は社会的、共同的性格をもっている」(〔10〕46頁)とされうる。人間の社会的性格は、人間の生成と同一であり、その意味で本源的であるということである。それ故、ここに改めて労働

による人間の社会的性格の生成を言うことは適切でないかもしれない。しかし、その社会的性格とは、単なる集団的行動としての特質が労働の媒介において質的に変容せしめられたものとして、ここで労働による創造として規定されるのである。動物に見られる群居生活における本源的な意味としての社会的、共同的性格としてではなく、労働を通して形成された社会的性格が人間を人間として規定する基本的な性格なのである。¹⁾

《労働と意識的・計画的性格》

次に、エンゲルスは、「本来の労働」とは、「道具の製作から始まる」として、道具の使用は「人間化するための本質的な一歩」（[33] 487頁）を進めるものであったとしている。道具とは「手の特殊化」であり、「道具は人間に特有の活動、自然に対する人間の変革的な反作用、つまり生産を意味する」のであり、道具をもつことによって「人間だけが自然に対して自分の刻印を押すということを成し遂げ」（[33] 353頁）ることができたということである。道具を使うことによって、人間労働は媒介的活動としての性格をもつのであり、道具の改良と共にその性格を益々発展させることになる。

道具の使用は、人間を自然から遠ざけるものであったが、そのことは人間の活動が「あらかじめわかっている特定の目標に向けられた、前以て考え抜かれた、計画的な行動という性格」（[33] 490頁）を帯びるようになるということである。労働が「意識的・計画的な行動」として規定されるのは、道具の使用によって人間が直接的に自然と対峙しなくなることによって必然化せしめられたことによるのである。

然るに、活動における意識性と計画性とは、人間労働の能動的性格をより明確にすることになる。労働の能動性は、それ自体としては人間も自然の一部であることによって根源的なものとして把握されるのである。しかし、人間が道具を使用し、労働が意識的・計画的な性格を帯びるにいたることに於いて人間の労働の能動的性格はより強められるにいたるのである。活動の意識性・計画性と能動性において労働が人間を創造した第三の契機を認めることができるの

である。

更に、エンゲルスは、「手と発声器官と脳との協働—それは各個人においてだけではなく、社会においても行われた—によって、人間は、益々複雑な作業を遂行し、益々高度の目標を設定しこれを達成するという能力をもちえていった。労働そのものが世代を重ねることによって別のものになり、一層完全に、一層多面的になっていった」（[33] 489頁）としている。労働は「手と発声器官と脳との協働」を不可避とするのであるが、そのような協働の関係を通して人間はより一層高い労働能力を獲得するに至るのであり、労働そのものが「完全」に、「多面的」になるということである。それは協働関係における労働という人間的実践こそが人間の自己創造性を達成する基本的な契機であるということであり、そこにエンゲルスの特有の人間観をみるのできるのである。

かくて、エンゲルスは、労働による人間の生成をその社会的性格と意識的性格の創成において把握しているものといえよう。そこでは人間が本来的にもつ自然的性格は前提されているのである。それ故、ここでエンゲルスが与えた人間の契機に自然的性格を付加するならば、そこには人間の本性を構成する基本的契機をみるのできるのである。

《人間の自然支配の意義》

エンゲルスは、人間による「自然の支配」と自然による「人間への復讐」について言及したうえで、更に人間による自然の支配についてそれが人類史の上で果たす歴史的意義を問題にしている。動物は、「外部の自然を利用するだけ」であり、「そこに居合せただけで自然の中に変化を生じさせているだけ」であるが、これに対して人間は、「自分が起こす変化によって自然を自分の目的に奉仕させ、自然を支配する」のであり、そこに「人間を人間以外の動物から分かつ最後の本質的な区別」が存するとする。自然を利用するだけでなく、「支配」という点において動物と人間の「本質的区別」が存するというのである。人間はその生活のためにそれにかなるように自然を変容させ、造りかえるということである。その意味では、ここでの自然の「支配」とは自然の「変

革」と解される必要がある。それに次いで、エンゲルスは、そのような「本質的区別」を生み出すものはまたもや「労働なのである」（[33] 491頁）としている。人間労働こそが自然を「変革」する基本的契機として規定されているのである。動物と人間との「本質的区別」を労働に求めるということである。然るに、その労働とは明らかに単なる生物的活動とは相違するものとして、まさに「意識的・計画的」性格におけるものとしての人間労働にほかならないのである。

自然の支配についてエンゲルスは、まず「手の発達に始まり、労働に始まる自然に対する支配は、新しい前進のたびごとに、人間の視野を拡大していった。自然物については、人間は新しい、これまで知られていなかった特性をたえず発見していった」（[33] 484頁）として、「生成しつつある人間」における自然の支配とは、自然についての発見それ自体であり、人間の視野の拡大と同義的なものとして把握されているのである。そのような「生成しつつある人間」による自然の支配について何らかの問題が生じるというわけではない。

これに対して、「生成した人間」における自然の支配とは、「二次的、三次的には、それは全く違った、予想もしなかった作用を生じ、それらは往々にして最初の結果そのものをも帳消しにしてしまうことさえある」（[33] 491頁）というようなものである。そこにおいて「自然の復讐」がもたらされるというのである。それ故、エンゲルスは、人間が自然を支配するということは、本来如何なるものとして理解されねばならないかを指摘する。

「我々が自然を支配するのは、…、何か自然の外にあって自然を支配するといった具合に支配するのではなく、—そうではなくて我々は肉と血と脳髓ことごとく自然のものであり、自然のただなかにあるのだということ、そして自然に対する我々の支配は全て、他のあらゆる被造物にもまして我々が自然の法則を認識し、それらの法則を正しく適用しうるといふ点にあるのだ、ということである」（[33] 492頁）。

ここでエンゲルスは、人間は「自然のただなかにあ」り、肉体のことごとくが「自然のものである」とする。人間と自然の関係において、人間といえども

自然の一部であること、自然そのものであることがまず確認されねばならないのである。それ故、自然を支配するということは「自然の法則を認識」し、その法則を「正しく適用」することにほかならないのである。人間が自然に対して干渉することから生じる「遠い将来の自然的結果」([33] 492頁)を認識した上での支配でなければならないということである。その際、エンゲルスは、この自然を支配し、規制することが本来の意味において可能なのは「我々のこれまでの生産様式と、又それとともに我々の今日の社会的秩序の全体を完全に変革すること」([33] 493頁)によってであるとしている。「すぐさま役立つごく直接的な労働の効果を達成すること」(同前)しか眼中におかない生産様式においては、自然は無際限に、無秩序に支配される傾向をもつのであり、それ故、そのような生産様式を変革することによってのみ、本来の意味における自然の支配が可能になるということである。「いままで人間を支配してきた、人間を取り巻く生活諸条件の全範囲が、いまや人間の支配と統制に服する」というような変革において、はじめて人間は「自然の意識的な、本当の主人となる」([38] 223頁)ということができるのである。

ここでのエンゲルスの自然支配の思想は、明らかに初期のマルクスが確立した自然主義の成果によるものである。人間も自然の一部であるということ、人間と自然との物質代謝過程を媒介するものとして労働が規定され、その労働が意識的・計画的に行われることにおいて、それは自然に対する支配というよりは、自然の制御とされるものであり、それ故、エンゲルスのそれは決して人間が自然を完全に支配下におくという思想を意味するものではないといえよう。

(Ⅱ) 労働と「人間の本質」

(A) 《「類的存在」＝「人間の本質」》

【「類的存在」と労働】

ここで問題にしようとするのは、マルクスが人間を「類的存在」として規

定していることと労働の関連について指摘していることに関わる。マルクスは、次のように指摘している。

「ヘーゲルが労働の本質を捉え、対象的な人間を、現実的なるがゆえに真なる人間を、人間自身の労働の成果として理解するという。人間が類的存在としての自分に対してとる現実的な、活動的な態度、或は人間が一つの類的存在としての、即ち人間的存在としての実を示すことは、ただ次のことによつてのみ可能である。即ち、人間が現実的にその全ての類的諸力を外へ出すことによつてであり、そしてそれら【外へ出された類的諸力】に対して、対象に対してのように振る舞うこと—これは又これで差し当たり疎外の形式においてのみ可能なのだが—によつてである」（[15] 216頁）。

これはヘーゲルのいわゆる運動させ産出する原理としての「否定性の弁証法」の評価に関連して述べられたものである。ヘーゲルが労働の本質を人間の自己産出過程として把握していることを評価した上での言及である。ここでは、人間は労働を通して「対象的な人間」を産出するのであり、この「対象的な人間」は、「現実的」で、「真なる人間」即ち、「類的存在」としての人間であるとされるのである。人間の本質的諸力を対象化し疎外することによつて、更にその対象化を奪い返し止揚することによつて、人間は「類的存在」としての人間を産出するということである。しかもマルクスは、その産出過程が「類的諸力」の発現として把握しているのである。いずれにしろ、ここではマルクスは、労働の概念を類的存在との一定の連関において捉えようとしているのであり、そこにヘーゲル評価の一つの積極性が存在するのである。『草稿』の特徴の一つとして「労働」の概念と「類」の概念とが必然的な関連において把握されていることが確認されるものといえよう。

ところで、初期のマルクスにおいて、「類」概念は、「世界の理論的再構成の不可決の原理」（[46] 147頁）として位置付けられていたのである。『草稿』迄の時期のマルクスにおける「類」概念のもつ重要性について、宮本十蔵氏は、「彼がそれを用いてブルジョア社会の分析と批判を行い、その命運を見定めるところにある」（[46] 152頁）とされ、その「類」概念を用いることによつて

「ラディカルな人間と社会の解明をなした」([46] 157頁)とされている。『草稿』における疎外の理論が「マルクスの世界観的自己了解の性格」([48] 244頁)をもつものであるとすれば、その理論的中核としての「疎外された労働」を概念として生成せしめることは不可欠の前提である。概念としての「疎外された労働」とは、「人間の本質、人間の生活の疎外を暴き出し、従って人間存在全体を包括する矛盾を露にする」([62] 387頁)ものとして規定されるのである。

然るに、そのような概念の設定を可能ならしめたものこそがフォィエルバッハの影響を残しているとされる「類的存在」という哲学的概念であったのである。マルクスにおいて「人間的解放」という緊急の課題に応えるものとして、「疎外された労働」が一つの概念として確立されたのであるが、その「疎外された労働」の理論的基準としての「疎外されない労働」の意味するところを明確にしておくことが必要であったのである。それが人間本来のあり方、人間の存在に関わるものとしての「類的存在」がマルクスによって改めて持ち出されてきた理由でもある。この点を梅本克己氏は、マルクスは、「疎外された労働」という現象を媒介として「疎外されざる姿における『人間の本質』、いわゆる類的存在としての人間の本質を定立した」([27] 52頁)とされている。

いずれにしろ、『草稿』の理論的特徴の一つは、労働が人間の「類的存在」と極めて密接に結び付けて論じられているということにあるのである。「類的存在」が意識的に追及されているのであるが、それは人類史の出発点に「自然を自己の非有機的肉体とする類的存在としての人間」([27] 119頁)が置かれることによるのであり、そのことが疎外論の性格、構造を規定することになっているのである。とはいえ、マルクスが人間の本質を「類的存在」として規定し、それによって「疎外された労働」論として、経済学の体系、従って批判的私的所有論を展開しようとするのは、『草稿』迄のことであり、その後のマルクスにおいては「類的存在」という概念は全く使用されなくなる。そのこと自体は、マルクスにおける唯物史観形成に関わる重要な論点を形成するものである。²⁾

【「類的存在」の二つの規定】

「類的存在」が一つのまとまりにおいて論じられているのは、主として『草稿』の「第一手稿」の「疎外された労働」の第三規定に関連してである。ここではマルクスは、「物の疎外」、「自己疎外」、「類的疎外」、「人間の疎外」の四種類の規定によって「疎外された労働」を一つの概念として設定しようとしているのである。その四者の論理連関は、「物の疎外」と「自己疎外」から「疎外された労働」が「人間の類的存在」を疎外するという規定が導き出されるものとされ、次いで、それら三つの規定から「一つの直接的帰結」（[15] 108頁）として、「人間の人間からの疎外」が論定されるとされている。それは第四の規定を第一の規定～第三の規定の総括、私的所有の一般的表現として把握するということである。

然るに、マルクスは、別の箇所では「人間の疎外」を独立した第四の契機としてではなく、類的疎外の一つの内容をなすものとしているのである。それは「疎外された労働」論の結論的部分においてみることができる。マルクスは、「人間から彼の類的存在が疎外されているという命題は、ある人間が他の人間から疎外され、又彼等の各々が人間の本質から疎外されている、ということ」（[15] 108頁）であるとしているのである。類的存在からの疎外が人間の本質から、更に人間からの疎外として把握されているのである。そこでは人間の本質の疎外が他の人々に対する関係において露になり、実在化されるものとして把握されているのである。労働者の生産物と労働者の活動の疎外が人間の疎外の実態的内容を構成することになるのであるが、その二契機が「類的存在」としてひとまず総括されたうえで、人間からの疎外が論じられることになるのである。³⁾

中川弘氏は、疎外された労働論の総括的＝本質的規定は、「人間が類的存在としての人間の本質から疎外されること、その実体的内容は、人間が『真に共同的存在』としての実を失い『直接的に共同体的』な活動、享受の関係を喪失すること」（[44] 37頁）として要約されるものであるとされる。そのことは類的存在は単に人間の本質的存在に関わる規定のみではなく、共同的存在としての規定を含むということを示唆するものである。

かくて、「類的存在」からの疎外とは、第一に「人間の本質」からの疎外であり、第二にある人間が他の人間から疎外されているということであるといえよう。然るに、そのことは、同時に「類的存在」とは基本的には、「人間の本質」と「人間の人間に対する社会的関係」、従って「共同的存在」としての規定を内容とするということでもある。問題は、この二契機がどのような関係にあるものとして理解されるかということであるが、中川氏は、この両者は「相互補完的關係」にあるとされる。しかし、両者はむしろ次的に相違するものとして把握されねばならないのである。即ち、人間の本質としての規定は最も基本的ではあるが、しかし、それ自体として人間を成立せしめる現実的根拠たりえないものである。それ故、その基本的規定に実在的根拠を与える場が改めて問題にされねばならないのであり、それが共同的存在のとしての規定である。人間を現実的に人間として生成せしめる場こそが共同体なのである。その意味では、マルクスにおいては共同体とは人間を人間として形成する「場」として把握されていたのである。⁴⁾

【人間の本質】

マルクスが人間の本質に関わって「類的存在」からの疎外を問題にしているのは、「疎外された労働は人間から、①自然を疎外し、②人間自身を人間の自己の活動的機能を、人間の生活活動を疎外することによって、それは人間から類を疎外する。それは人間にとって、類的生活を個人的生活の手段たらしめる」([15] 105頁)ということにおいてである。類的生活を「個人的生活の手段」たらしめるということは、「疎外された労働」が人間の本質を規定する「自己活動、自由な活動」を生活のための単なる手段に引き下げ、そのことによって、人間本来の生き方を不可能にし、人間を唯単なる肉体的生存に墮してしまふということである。それ故、ここから、「類的存在」とは、「人間の活動的機能」、「人間の生活活動」である「類的生活」を営むことであり、「自己活動、自由な活動」を営む存在として規定されるのである。労働が疎外されているということは、人間の本質としての労働が本来的に行われぬということ、

自由な活動が不可能であるということであるが、それが「類的存在」から疎外される⁵⁾ということの内実である。

まず、マルクスは、人間が「類的存在」であるというのは、人間が「類」を「実践的、理論的」に人間の対象とするからであり、人間が自分自身に対して「現在の生きた類」に対してのように振る舞うからであり、人間が自分自身に対して「普遍的で、自由な存在のように振る舞う」([15] 104頁)からであると。それは極めて一般的な規定であるが、マルクスは、それを具体化するための手懸りを「類的生活」の特質に求めるのである。

「類的生活」を特質付けるものは、人間が自然的存在であることと意識的存在であることとの二面である。人間が自然的存在であるということは、人間が肉体的には動物と同じく「非有機的な自然（外部の自然）によって生きてゆく」([15] 104頁)ということである。「人間の肉体的、精神的生活が自然と連関」([15] 105頁)しているものとして把握するということである。人間は、全自然を、彼の「直接的生活手段」と「人間の生活活動の材料、対象、道具」(同前)として、自分の「非有機的身体」としているのである。

人間は死なないためには、「自然と絶えず係りあっていなくてはならない」(同前)のであり、絶えざる自然との物質代謝が必要なのである。人間は絶えず自然に結びつけられており、人間は「自然の一部」(同前)であるが、それは自然の中で、自然を通してのみ、人間は自分の可能性、要求、生活活動を実現するということである。欲求をめぐる生活活動という点において人間も動物と共通であり、その生活衝動を有するという共通性の確認の上で、マルクスは、人間の本質的規定を明確にしているのである。

自然的存在としての人間が動物よりも普遍的であるというのは、「人間がそれで生きてゆく非有機的な自然の範囲」が「普遍的」(同前)である点に存しているからである。それは人間が精神的生活を人間的生活の一部を形成することにおいてである。次いでマルクスは「人間の普遍性が実践的に現れる」のは、「全自然を人間の非有機的身体にするとところの普遍性においてである」(同前)とする。人間の普遍的性格は、全自然を自己の生活手段として取り込むその

「範囲」において規定されるということである。ここで「普遍性」とは類的性格を規定するもののことであるが、マルクスは、それを実践的な普遍性として、生産における普遍性として規定するのである。動物は「一面的に生産する」だけであるが、「人間は普遍的に生産する」([15] 107頁)ということである。⁶⁾

人間が意識的存在であるということは、人間の活動は自由で、意識的であるということである。マルクスは、「生産的生活は、類的生活」であり、生活活動の仕方の中に「一つの種の全性格、その類的性格が含まれているのであって、自由な意識的な活動が人間の類的性格である」([15] 106頁)とする。マルクスは、人間の活動が「自由で、意識的」であるが故に、人間は、「彼の生活活動そのものを、彼の意欲及び彼の意識の対象とする」(同前)ことができるとする。人間は生産活動において、その活動そのものを対象として設定することができるということである。マルクスは、人間による自然との物質代謝活動、従って生産的活動において自由な意識の源泉が存在するものとして把握しているのである。「人間の類的性格」は「自由な意識的な活動」として規定されるのであるが、そのような活動こそが人間を現実的に「一つの類的存在」にする契機でもあるということである。⁷⁾

次いで、マルクスは、「意識的生活活動」こそが、人間と動物を「直接に区別する」契機であり、「人間は一つの類的存在である」(同前)として規定されることになるとする。人間が意識的存在であるということは、その生活を「意識の対象」とすることができるということであり、その場合に、活動は「自由な活動」でありうるのである。マルクスは、それこそが「人間が一つの類的存在である」ということであるとする。

然るに、人間を「一つの意識的な類的存在」として規定することのできる条件は、「ある対象の世界を実践的に生み出すこと、非有機的な自然に労働を加えること」(同前)である。ここに「労働の普遍的規定」([57] 22頁)が存するとみることでもある。いずれにしろ、人間を現実的に「一つの類的存在」として実証する契機は、労働であるが、それは「自由な意識的な活動」として規定されるものである。人間を現実的に「類的存在」として定立せしめる実践的契機

として規定される「自由な意識的な活動」としての労働が人間活動の本来のあり方にほかならないのである。労働は人間的生命の自己実現として捉えられ、それ故に、人間が類的存在として規定される根拠は労働そのものに他ならないのである。「自由な意識的な活動」である生産によって諸対象をその法則に従って加工することが、「類的存在」としての実を示す活動＝「類的生活」であるということである。

「自由な意識的な活動」としての生産によって生み出された自然は、「人間のした仕事」であり、それ故、労働の対象も「人間の類的生活の対象化」（〔15〕107頁）として現れることになる。マルクスは、それを「人間は自分を、意識の中でのようにただ知的にだけでなく、仕事の活動で現実的に二重化するからであり、従って、自分によって創造された世界の中で自分自身を目の当たりに見るからである」（同前）として、それ故、人間から生産の対象を奪い取るとは、類からの疎外であるとする。そこでは「対象化」された結果が奪われるということが問題なのである。

人間が自然的存在であると同時に意識的存在であるということは、類的生活の二側面をなすのであるが、それは同時に生産的生活において実証されることになる。生産的生活においてかの二契機は統一されているのである。対自然との能動性において人間が動物と区別されるのは、動物は「一面的にしか生産しない」が、人間は「普遍的に生産する」ということにおいてである。動物は「自分自身を生産する」にすぎないが、人間は「全自然を再生産する」（〔15〕107頁）のである。全自然の再生産とは、人間は「あらゆる種の尺度に従って生産する術を知っており、どこでも、内在的な尺度を対象に当てる術を知っている」（同前）ということである。人間は対象自身のもつ固有の尺度に従って生産を行うことができるのである。

ところで、人間の本質としての「類的存在」が実現されるということは、「自由な意識的な活動」としての労働が行われるということと同義である。マルクスにおいては「類的存在」とは何か具体的な内容をもつものとして想定されているのではなく、本来の労働において実現される人間の本質のことにほか

ならないのである。「自由な意識的な活動」としての本来の労働が現実社会においては、疎外されたあり方として、「疎外された労働」として現存しているというのが、マルクスの近代社会把握の根底に存する視角である。ここで、「物の疎外」、「自己疎外」は、同時に労働の自然的契機と自己意識的契機を含意するものである。それ故、類的本質からの疎外は、かの疎外の二契機を統一的に示したものであるとして理解されうるのである。

以上の点から、池谷寿夫氏は、「類的存在」とは、「人間的生活並びに人間の活動である生産—精神的生産をも含めた—を通じて自然を彼の「生活手段」として我がものとするという、人間の本質的な生活過程を表す概念である」(〔59〕219頁)とされている。

マルクスは、労働の特質を「自由で意識的な活動」として規定しているのであるが、中川弘氏は、そのことは、人間が「対象固有の『規準』にそっての『合目的な活動』を能く行いうる存在であることを『含蓄』するとして、「何故ならば、人間の『労働』は『意識的』というその特質において『合目的』活動となり、『意識的』＝『合目的』であることにおいて人間は自己の『労働』の『方式』を能く自己変革しうるものとなると考えられる」(〔51〕35頁)からであるとされている。

人間の活動が「自由で、意識的」であることは、同時に人間の活動が「合目的」性格をもつものとして把握するということである。しかし、労働の特質把握において「意識的」と「合目的」とはそこに包含される内容が相違するものといえよう。『草稿』当時、労働の人間の本質を「自由で、意識的」として規定することは、いわば「疎外された労働」を規定するものとしての意義をもっていたのである。「自由で、意識的」な活動の否定されたものが、現実の労働、強制労働であるということである。これに対して『資本論』において設定されている労働の「合目的」性格とは、歴史貫通的な規定である。それは労働がどのような形態で行われるにしろ、労働が行われる限りにおいて存在する規定である。労働が「合目的」な性格におけるものとして規定されるとき、そこには否定概念は存在しないのである。労働における「合目的」な性格は、

労働手段が概念的に定立されることによって明確になる規定であるとはいえ、それは歴史貫通的なものである。労働の歴史貫通的性格が合目的であり、且意志的であると規定されるということは、疎外された労働においても、その根底においては合目的に、意志をもって行為する人間が存在するというを確認するというにほかならないのである。かくて、目的定立的性格をもつものとして労働が把握されていないところに『経済学・哲学草稿』における労働の概念的特質が存在したのである。然るに、労働を「合目的」な性格におけるものとして把握するというは、労働の構造的把握の視角を前提とするのである。

【共同的存在】

マルクスが「人間の本質」を「共同的存在」に求めている典型的な箇所は『ミル評註』においてである。そこでは、労働を本質的には「生命の自由な発現」であり、「生命の享受」（[50] 118頁）として規定したうえで、その労働は同時に①「生産そのものの内部での人間の活動の相互交換」（＝協働）、②「生産物の相互交換」としても規定されることが必要であるとする。「真に人間的な生活を営むため」には「相互的な補完行為」（[50] 98頁）が必要とされるが、そのような行為が労働の新たな規定として付加されねばならないということである。その際、その現実の、意識的な真の定在は、「社会的活動、社会的享受」（[50] 96頁）であるとする。活動とその対象を通じて結び付けられる人間相互の関係が、労働における社会的活動としての性格として把握されるのである。

次いで、マルクスは、次のように指摘している。

「人間は真に共同的存在である、というのが人間の本質であるのだから、人間はその本質を発揮することによって人間的な共同体を即ち、個々人に対立する抽象的普遍的な力になることの決してない、むしろそれ自身が個々人全ての本質であり、彼等自身の活動、彼等自身の生活、彼等自身の精神、彼等自身の富であるような社会的組織を創造し、生み出すのである。だから、あの人間

の真の共同的存在は、決して反省によって生ずるのではない。思うに、それは諸個人の必要とエゴイズムによって、即ち、彼の定在そのものの活動を通して直接に生み出されるのである。この共同的存在が存在するや否やは、人間から独立している。だが、人間が自己を人間として認識していず、従って世界を人間的に組織しおえていない間は、この共同的存在は疎外の形態のもとに現れる」(150) 967頁)。

ここでは、先ず第一に問題にされているのは、「人間の本質」とは、「真に共同的存在である」ということであり、その人間的本質の発揮によって「人間的な共同体」、従って「それ自身が個々人全ての本質」であるような「社会的組織」が創造されるということである。第二に、そのような社会的組織、共同体は、「諸個人の必要とエゴイズム(欲求)」によって、即ち、「彼の定在そのものの活動」を通して直接に生み出されるということである。「諸個人の必要とエゴイズム(欲求)」＝労働的実践活動によって生み出される「社会的組織」とは、「労働することによって人間的な欲求を充足するとともに、人間的な本質を対象化し、かくして他の人間的な存在の欲求にそれにふさわしい対象物を供給した」(150) 117頁)と意識されるような組織であり、更に、個人的な活動において「他の人間の生命発現をつくりだす」ことが可能であり、「人間的な本質」、「共同的存在」が「確証、実現」(150) 118頁)されるということである。個人的活動が他者の欲求物を供給することによって、自己の労働が他者の本質の補完物となり、他者の不可欠の一部分であることが確証されることになるということである。そこでは人間的な本質が即時的に労働における協働関係を生み出すものとして把握されているのである。

然るに、「共同的存在の主体」である人間が、「自己疎外された存在」である場合には、この「共同的存在」は、「疎外の形態」のもとに現れることになるというのである。これが第三の指摘である。「共同的存在」は、私的所有のもとでも私的所有の相互外化・譲渡を通じて、又「労働の分割」において、それ故、「疎外された形態」において形成されるとされるのである。国民経済学は「共同的存在」を「交換並びに商業という形態でとらえている」(150) 98頁)の

であるが、それは「共同的存在」の「疎外された形態」にはかならないのである。かくて、マルクスは、人間自身の疎外とその共同的存在の疎外とは、「同一の命題」（[50] 97頁）であるとするのである。

ところで、「私的所有者の私的所有者に対する関係」として現れる交換のうち、生産物の交換において貨幣の媒介を前提した場合、「労働は直接に営利を目指す労働になる」（[50] 102頁）とされている。ここでは、労働者の共同的存在、従って、労働の社会的性格は、交換を媒介とした「労働者に疎遠な社会的連絡」（[50] 103頁）によって規定されることになる。活動そのものの相互的な補完と交換は「分業となって現象する」（[50] 104頁）ことになるのである。分業においては「人間的労働の統一性」（[50] 104頁）は専ら分割されるものとみなされ、交換を媒介にして労働の統一性が実現されることになる。その分割された個々の労働がここでの営利労働のことであり、夫々の「営利労働を結合する仲介者は貨幣である」（[50] 105頁）とされる。

かくて、「共同的存在」とは、個々人の労働が直ちに人間の本質を確証し、実現できるような社会的組織を前提するということであり、その意味では諸個人の協働とその結果としての生産物の交換が「社会的活動と社会的享受」として規定されるのであり、かかるものとして、それは真に人間的な生活を現す概念として規定されているのである。

「第三草稿」において「共同的存在」がそれ自体において問題にされているわけではない。ここでは差し当たりそれのもつ意義について、鈴木伸一氏の所説を検討することにする。鈴木氏は、次のように指摘される。

「マルクスは共同的存在を人間の自己産出行為と、そこにおいて生命諸力を確証する対象に、つまり労働と、その対象としての自然に密接に結び付け」ているのであり、「自然を人間的世界へと加工・産出し、これを通じて自己自身を確証し、変化させ産出していく行為がまた、人間の共同的存在を実現する行為でもあり、労働の所産は、個々人の生命諸力の対象化の定在であると共に、共同的存在の現れでもある」（[61] 91頁）。

鈴木氏は、労働とその対象は「共同的存在」によってのみ、「類的諸力の確

証、実現とその対象化」となるとされるのである。次いで、「共同的存在が労働と、その対象としての自然に関係付けられることによって、マルクスの共同的存在の概念は疎外とその止揚の運動という弁証法的発展過程のなかで捉えられることになる」([61] 92頁)とされる。「疎外された共同的存在は疎外された労働によって生み出される」のであり、それ故、疎外された労働が止揚される時、「疎外された共同的存在も止揚される」ことになるということである。かくて、鈴木氏は、「労働とその対象はこの解放された共同的存在において本来的に人間的なものとして、つまり類的諸力の本来的な確証・実現の行為と類的諸力の対象化として定在する」ものとすれば、マルクスにとって、「社会主義は何よりもこのことの歴史における実現にかかわる」(同前)ことになるとされるのである。

ここでは、「共同的存在」は、労働とその対象が「類的諸力の確証、実現とその対象化」を図るものとして、人間と自然との統一を実現するものとして把握されているのである。疎外された労働の解放によって、従って人間の自己疎外としての私的所有の止揚によって、かかるものとしての「共同的存在」が実現されるということである。

かくて、私的所有の積極的止揚による共産主義の生成を論じることは同時に、「共同的存在」の意義を問うことでもある。即ち、「共同的存在」とは何かを問うことは、積極的に止揚される私的所有とはどのようなものであり、又実現されるべき共産主義とはどのような内容かを明らかにすることになるのである。そこでは同時に共産主義の概念的規定が明確になるとともに、マルクスにおける類概念は、社会概念へと移行することが示される。

マルクスは、「歴史の全運動は、共産主義を現実的に産出する行為」([15] 146頁)であるとして、その「行為」とは、「人間の自己疎外としての私的所有の積極的な止揚によって生み出されるもの」であるとしているのである。そこでは、共産主義とは、「人間による、人間にとっての、人間の本質の現実的な獲得」であるということ、「完全な、意識的」となった、「一個の社会的な、即ち人間的な人間としての人間の、自己にとっての帰還」([15] 145~6頁)を意

味するものである。それは換言すれば、「如何に人間が人間を、自己自身と他の人間を生産するか、如何に人間の個性の直接的実証である対象が同時に、他の人間にとっての己自身の現存在であり、他の人間の現存在、しかも己にとっての他の人間の現存在であるか」（[15] 147～8頁）ということである。人間の本質を獲得することが同時に人間が社会的人間として生成することであるが、その社会的人間としての生成が同時に共産主義の誕生を意味するものであるということである。

かくて、マルクスにおいては、共産主義とは「人間と自然との間の、又人間と人間との間の抗争の真実の解決であり、現存在と本質との、対象化と自己確認との、自由と必然との、個と類との間の争いの真の解決」（[15] 146頁）を意味するものとして把握されているのである。

マルクスは、私的所有は、現実の中で「他の人間たちに対する実践的現実的な関係」を通して現れてくる労働者の自己疎外を考察すれば、「外化された労働の、即ち労働者が自然及び自己自身に対する外的関係の、所産であり、結果であり、必然的帰結である」（[15] 113～4頁）ということが分かるとする。私的所有は、「外化された労働の物質的な、要約された表現」（[15] 117頁）として把握されているのである。

然るに、私的所有が「疎外された労働」の「必然的帰結」であるとすれば、そこから、私的所有とは「疎外された人間的生活の物質的感性的な表現」（[15] 147頁）であるということ、「人間が自分にとって対象的となりそして同時にむしろ自分にとって一つの疎遠な非人間的な対象となるということの感性的表現」であり、「人間の生活表明が彼の生活外化であり、人間の実現が彼の現実性剝奪、疎遠な現実性であるということの感性的表現」（[15] 150～1頁）であるということが導かれる。即ち、私的所有とは、「本来的な人間的生活」（＝「類的存在」）の疎外された形態であり、人間の現実的な社会的結合＝人間の他の人間に対する「社会的あり方」（＝「共同的存在」）の疎外された形態であるということである。私的所有の下においては、人間活動の本来的性格である社会性は疎外の形態において示されることになるのである。「私的所有の主

体的本質が労働である」（[15] 135頁）とすれば、その主体たる労働の疎外された形態の完成は、私的所有それ自体にほかならないのである。それ故、マルクスは、「産業資本が私的所有の完成された客体の姿」（[15] 140頁）であるとするのである。⁹⁾

マルクスは、かかるものとしての私的所有が「積極的に止揚される」ことによって、「人間的な生活」が「我がもの」（[15] 147頁）として獲得されることになり、「彼の人間的な、即ち社会的あり方」へ「帰還」（同前）することになるとする。ここでは、「人間的」の内容と「帰還」とは何を意味するかが問題である。

私的所有の止揚、疎外された労働の解放においてマルクスが強調するのは、「人間的」ということである。それは、人間的な本質としての全面的な発展、社会的本質としての人間の発展を意味するものとされねばならないのである。かくて、「人間的な即ち社会的なあり方」（[15] 147頁）として、「人間的」であることが同時に「社会的」な性格を意味するものとして把握されることになる。

マルクスは、「人間的」であることは同時に「社会的」であるとしたのであるが、それは「人間として活動しているが故に社会的」であり、「私自身の現存在が社会的活動なのである」（[15] 149頁）ということである。従って、一方で「社会自身が人間を人間として生産する」とすれば、他方で「社会は人間によって生産されている」（[15] 148頁）ということである。そこでは、人間における本来的な「活動と享楽」とは、「社会的」な性格をもつものとして、「社会的活動と社会的享楽」として規定されるのである。かくて、マルクスは、「自然の人間の本質は社会的人間にとってはじめて存在している」のであり、それ故、「社会は、人間と自然との完璧な本質一体性」（同前）であるとする。メサーロシュの言葉を借りれば「人間的諸力の全てに共通の分母は社会性である」（[56] 236頁）ということになる。

しかし、そのことはそれまで論じられてきた「類」概念が「社会的」として論じられるに至っているということである。歴史の運動全体、人間の人間としての全運動の一般的性格が「社会的性格」（[15] 148頁）に存するとされるので

ある。それ故に、「個人は社会的存在」（[15] 149頁）であり、「人間は特殊な個人であり、その特殊性が彼を個人にする」（[15] 150頁）とされるのである。人間は一方では社会的存在であり、他方では特殊的存在であるということである。「共同的存在」とは、社会的存在としての本質を同じくする人間が区別に基く統一を図ることである。それ故、「個人の生活表明」は、「社会的生活の表明であり、確証である」とされるのであり、そのような場合、「人間の個人的生活と類的生活とは別個のものではない」（[15] 149～50頁）ということである。

かくて、マルクスにおいては、人間の社会的本性の根拠が、一方では、人間それ自体において求められ、他方では、生産がその本質上社会的過程として行われること、従って、生産活動における類的性格（共同的活動様式）に求められているのである。物質的生産が人間の活動の特殊な、類的な規定的な形態であるということである。この物質的生産は、個人の他のあらゆる活動形態の基礎をなす。それ故、これらの活動形態も又社会的性格をもつのである。生産は本質的に社会的過程であるとされるのであるが、そのことによって人間の社会的本性は規定されているのである。¹⁰⁾

疎外から「帰還」する際の人間の本質とは過去において存在していたものではない。その内容を明確にするためには、私的所有の止揚について、それが「積極的」であるとされていることの意味を明らかにすることが必要である。それを「社会進歩の合法則的形態であるような揚棄」（[60] 398頁）としたのは、オイゼルマンである。しかし、それは「積極的」の意味を十分に把握したものとはいえないであろう。「私的所有の止揚」それ自体は「合法則的」であるが故に肯定されるのであり、問題はそれが何故「積極的」として形容されるのかということである。

マルクスは、「私的所有の止揚は、全ての人間的な感覚と性質の完全な解放である。しかしそれがこの解放であるのはまさしく、これらの感覚と性質が主観的にも客観的にも人間的になっているということによってである」（[15] 152頁）としている。そこで指摘されていることは、「疎外された労働」のもとにおいてであれ、人間の「感覚と性質」が人間的なものとして生成するというこ

とである。「疎外された労働」それ自体は、労働の一面化であり、非人間化を結果するものでしかないとはいえ、そのような「疎外」的状况にも関わらず、労働を通して「人間的な感覚と性質」がより人間的なものへと発展していくということである。「疎外された形態」においてではあれ、しかも「疎外された労働」を通してのみ、人間の感覚と性質はより人間的なものへと発展していくこととしてマルクスは理解しているのである。この人間的感覚と性質自体が、従って五感の形成が「これまでの全世界史の労作である」（〔15〕154頁）とされるのも、疎外のいわば積極的側面をみることの結果である。

マルクスは、「人間の発展の本質の中に根ざしている」疎外、「外化された労働が人間の発展行程に対してもつ関係」（〔15〕116頁）が問題であるとしているが、それこそがここでの問題である。細谷昂氏は、「積極的」とは、「私的所有の否定面にのみ心を奪われるのではなく、その『積極的本質』を踏まえ、その止揚として、『社会的人間、つまり人間的な人間としての自己への還帰』を意味するもの」（〔47〕77頁）であるとされる。私的所有の「積極的な止揚」を問題にするということは、そこでは、「私的所有の積極的本質」、「要求の人間的本性」（〔15〕145頁）の理解が前提とされるということである。それ故、マルクスは、「積極的」でない私的所有の止揚について、それは、「現実的な我がものとする獲得」ではなく、「教養と文明の世界全体の抽象的否定」であり、「貧しくかつ要求の無い人間の不自然な単純さへの還帰」（〔15〕143頁）にほかならないとしているのである。

かくて、私的所有のもとでの「人間的な感覚と性質の発展」、疎外された労働における積極的側面とは何かが問われねばならないのである。この点については、マルクスが産業について言及していることを見ておこう。

マルクスは、「産業は人間に対する自然の、従って自然科学の、現実的な歴史的關係である」（〔15〕157頁）として、「産業の歴史と産業のすでに生成した対象的現存在とは、人間的な本質的諸力の披かれた書物であり、感性的に眼前にある人間的な心理学である」（〔15〕156頁）とする。産業とは、「人間的な本質的諸力」（同前）が活動を通じて展開された結果であり、それ自体は本質的

諸力の疎外された形態である。しかもその疎外された形態を通して「人間的な本質的諸力」の発展が可能であり、現実発展しているということである。マルクスのそのような評価の仕方は、自然科学についても当てはまる。自然科学は、「人間性剝奪を完成した」とはいえ、「それだけ一層実践的に、産業を介して、人間生活の中へ食い込んでこれを變形し、人間的解放を準備した」（[15] 157頁）として、その歴史的意義が評価されるのである。

かくて、人間の「本質的諸力」が疎外のもとであるとはいえ対象的に展開されてはじめて、「主体的な人間的感性の富」が形成され、「人間的な本質的諸力として確証される諸々の感覚」（[15] 154頁）が発達させられ、産出されることになる。マルクスは、「人間的本質の対象化」が、「人間の感覚を人間的ならしめるためにも、又人間的かつ自然的な存在者の富全体にとってふさわしい人間的感覚を創造するためにも」、それ故「理論的な点においても実践的な点においても必要」（[15] 155頁）なのであるとしている。理論的とは精神的運動であり、実践的とは物質的運動である。このような運動を通してのみ、「全ての且深い感覚をもった豊かな人間」（同前）が形成され、「真に人間的」な基準が形成されるということである。人間の類的本質は、疎外の形態においてのみ現実化され、発展させられてきたのであるが、その疎外の形態を通して創造されたものこそが「帰還」すべき人間的の本質にほかならないのである。

我々が眼前に見出す人間の五感とは、「全世界史の成果」である。そのことは同時に、人間の本質的活動それ自体の発展も「全世界史の成果」として把握されねばならないことを示している。「疎外された労働」によって、「疎外された形態」によるものではあれ、労働力として発揮されうる人間の本質的諸力は発展せしめられてきたのである。それがいわゆる生産力の基本的契機の発展の現実的な姿である。

ところで、マルクスは、分業とは、「疎外の内部での労働の社会性の国民経済学的表現」であり、「一つの実在的な類的活動としての人間的活動の、或は、類的存在としての人間の活動としての人間的活動の、疎外された、外化された定立」（[15] 183頁）であるとしている。分業を「人間的活動の疎外された形

態」として把握するということである。それは労働が「外化の内部での人間的活動の一表現」であり、「私的所有の本質」（同前）であるとすれば、必然的な帰結でもある。換言すれば、分業とは「疎外された労働」にほかならないということである。その際、分業として現実的形態をとるものとされる「疎外された労働」とは、「人間の人間からの疎外」の規定におけるものである。「人間の人間からの疎外」とは、現実的には分業の体系において我々の眼前にあるものであるということである。

ここで「労働の社会性」とは、マルクスにおいては、「一つの実在的な類的活動としての人間的活動」と同一のものとされている。その点は、『ミル評註』においても、「類的活動」は、同時に「社会的活動」（[50] 96頁）であるとされていることから指摘される。即ち、「分業」という「疎外された労働」の具体的な顕現の形態を論ずるに際して、マルクスは、「類的活動」を「社会性」に還元しているのである。それ故、分業の問題が分業一般としてではなく、工場内分業と社会的分業とにおいて展開されるに至るならば、「類」は「社会」概念のものに包摂されてしまうものといえよう。「類的存在」を基軸に設定することによって、豊富化された「社会」概念が、社会的性格として整序されるならば、「類的存在」はその独自の意義を失うことになるのである。

- 1) エンゲルスは、別の箇所では、次のように人間の活動の社会的性格こそが人間を人間として生成せしめる契機であるとしている。

「私の見解では、社交本能こそ、猿から人間への発達の最も重要な槓杆の一つだったのです。最初の人間は、群れをつくって生活していたに違いなく、我々が遡ってみることができるかぎりでは、実際にそうだったことがみいだされます」（『マルクス・エンゲルス全集』34巻、大月書店、141頁）。

- 2) 中川弘氏は、唯物史観の形成における『パリ草稿』の意義について、「問題の核心は《類的存在》としての人間という主体概念をどのような内容のものであったかを評価するか」ということであり、「歴史の主体概念の内容こそが、当の歴史観をして唯物論的歴史観たらしめるかを決する分水嶺である」（[51] 19頁）とされている。
- 3) 広松渉氏は、第三規定の「類」からの疎外とは、他の諸契機と並列の関係にあるものではないとされている。「マルクスは第四の契機として『人間からの人間の疎外』ということ述べているにもかかわらず、後で総括する場面では、『人

間からの人間の疎外』ということ第三の契機として処理しており、『類の疎外』という論点は自立的な形では現れない。翻って考えれば、しかし、類の本質の疎外ということは、他と並ぶ契機ではなく、3契機を通ずる根底的構造のほずであり、いうところの疎外諸形態の本質をなすもののはずであって、並列されるのがもともとおかしいわけである」として、マルクスにおいて「類＝類的本質の疎外」という論点を打ち出しておけば、それを媒介にして、『ある人間と他の人間との間の疎外』という立言を、“分析判断”として“論理的”には引き出すことができる」（〔7〕251～2頁）とされている。

- 4) 中川氏は、『経・哲草稿』（第一・第三草稿〔五〕）と『ミル評註』・第三草稿〔二〕とにおいて、「類的存在」についての規定に相違が存在するとされる。前者では、人間と自然との関係に焦点をあてつつ、「人間の内的諸力の特質」（〔44〕20頁）が主として問われたのに対して、後者では、「人間相互の関係に焦点がおかれ、人間がすぐれて『共同的存在』たるというところに類的存在規定の核を求めている」とされている。それは私的所有制の分析対象が前者では「階級関係＝搾取・収奪関係を基本的生産関係」とするものであり、後者では「自己労働に基づく商品生産者＝所有者によって構成される」ものであり、それ故、そこでは「階級関係を伴うや否やという相違」（〔44〕44頁）が存するとされる。湯田勝氏は、疎外の第三規定における「類的存在」論は、「何よりも労働過程論である」（〔53〕52頁）とされる。湯田氏は、「その最も基底的、一般的分析として、「類的存在」論は、歴史的、社会的形態基底を捨象した歴史貫通的労働過程を、動物の生命活動との対比において分析するものとして措定された」（〔53〕54頁）とされているのである。しかし、そこでは「歴史貫通的労働過程」とされるその内容が問題であるといえよう。湯田氏の指摘されることは「類的存在—自由な意識的活動」ということにすぎない。それが労働の歴史貫通的性格として把握されることの限界性は本文において示した通りである。
- 5) 大井正氏は、『草稿』における「労働の概念」の特徴として、それは「対象化」が不可決の規定とされていること、「類」概念と不可欠に結び付いて「労働」が「類」的活動として把握されていること、「類的存在」が「労働」の成果とされていることであるとされる。しかし、それと同時にそこには「重要な不備」があるとされる。それは「労働手段が明瞭に把握されていない」ということであり、従って、「労働を十分に過程としてとらえることができず、従って『対象』なる概念があいまいになってしまっている」のであり、「自然的な類」と「意識的な類」との関係も「不分明」（〔45〕115頁）のままであるとされている。
- 6) 梅本氏は、「普遍的」とは、次のようなことであるとされる。「それは対自然との関係の中に現れる生活の範囲にかかわる概念であり、その範囲を規定する概念である」（〔27〕36頁）。

- 7) 梅本氏は、「普遍性」の根拠は、「自然との直接的同一性からの離脱」にあるとされ、その「離脱」によって「加工すべき自然それ自体、実践的な対象として定立されてくる」のであり、「自由な意識的活動とはこの離脱を活動の面で規定したもの」(〔27〕41頁)であるとされ、更に、次のように指摘されている。「前提となるのは実在する自然、人間はその一部である。この基本的前提に立ってマルクスは、『類的存在』としての人間における『普遍性』の概念を具体的にその生活生産の様式のうちに規定したのであって、自然との無媒介な同一性からの離脱、それに基づく自由な意識的活動ということは、自己の生活を対象とすることができ、又その故に自由な活動といわれる人間的生産活動の可能根拠を規定する必然的契機として取り出されたものである」(〔27〕42頁)。
- 8) 鈴木茂氏は、疎外された労働一般の諸規定のうちには、「疎外された労働」の「普遍的本質、その類概念としての、労働一般の概念がかならず含意されていなければならない」とされ、そこでの労働一般の概念は「単に純粹な抽象的労働一般」とは異なり、いわば「疎外された労働」の類概念、その本質、真理として、疎外を止揚するような社会形態の労働の概念であるとされ、第一の規定は、「労働の対象性、その自然的、物質的活動性」を示すものであり、第二の規定は、「労働の自己性」の契機、「自己活動」としての労働の側面、「労働の自己関係的、自己意識的な契機」(〔57〕14頁)であるとされている。
- 9) 池田寿夫氏は、私的所有とは「自然に対する人間の意識的生活活動の疎外された関係であると同時に、他の人間に対する人間の共同関係の疎外態」であり、それ故、「私的所有は『類的存在』という人間の本質的な生活の過程と関係の疎外態」(〔59〕221頁)であるとされている。
- 10) この当時のマルクスの「社会」概念について、梅本氏は、「共同社会」と対立する意味での社会ではなく、「人間の生産活動の発展に伴って、様々な現存様式において類的=共同体的性格を規定してゆく人間の『社会』的本質を規定したものである」(〔27〕77頁)とされている。又、細谷昂氏は、『草稿』においては、「社会」概念は三重の意味をこめたものとして論じられているとされている。人間にとって社会的性格は①「歴史貫通的な、その意味で本質的なあり方」であるということ、かし、それは何か抽象的、理念的な「本質」としてあるわけではなく、②「現実の歴史の『全運動』の中で、分業と交換の体系として現実化され疎外されて」、「私的所有の積極的本質」として現存しているということ、③「人間の即ち社会的なあり方への還帰という未来の展望」(〔47〕79頁)ということ。

参考文献

- [1] 鈴木亨「人間と労働」『哲学』29, 1979年。
 [2] G. コールクシュ, 高橋/今村/良知『マルクス主義と人間学—カール・マ

- ルクスの哲学における人間本質の概念」河出書房新社，1976年。
- [3] 永井潔『芸術論ノート』新日本出版社，1970年。
- [4] 尾関周二『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』大月書店，1989年。
- [5] 尾関周二『人間観とその基底』『哲学のリアリティーカント，ヘーゲル，マルクス』有斐閣，1980年。
- [6] 里見賢治「資本制社会における労働と自由な労働」『社会問題研究』（大阪事業短大）23-1/2，1974年。
- [7] 廣松渉『青年マルクス論』平凡社，1971年。
- [8] 半田秀男「人間の『類的本質』について」『人文研究』（大阪市立大学文学部紀要）24-5，1972年。
- [9] 湯田勝「類的存在と理念—初期マルクスの方法論形成の一側面—」『社会科学の方法』（御茶ノ水書房）1973年2月号。
- [10] 尾関周二『言語と人間』大月書店，1983年。
- [11] 細見英『経済学批判と弁証法』未来社，1979年。
- [12] 平田清明『経済学批判への方法叙説』岩波書店，1982年。
- [13] 有尾善繁「自然と人間—労働のもつ人間的意義—」鱈坂真他著『人間とは何か』青木書店，1984年。
- [14] H. マルクーゼ，良知・池田訳『初期マルクス研究—『経済学=哲学手稿』における疎外論—』未来社，1960年。1961年。
- [15] K. マルクス，藤野渉訳『経済学・哲学手稿』大月書店（国民文庫），1963年。
- [16] 藤野渉「人間疎外の理論—マルクス『経済学・哲学草稿』における疎外の概念の検討—」『唯物論研究』5，青木書店，1961年。
- [17] 藤野渉「マルクスの疎外概念」『思想』1967年2月，4月号。
- [18] A. クレラ，藤野訳『疎外とヒューマニズム』青木書店，1967年。
- [19] A. クレラ，藤野渉訳『マルクスの人間疎外論』岩波書店，1972年。
- [20] 山之内靖『社会科学の方と人間学』岩波書店，1973年。
- [21] 内田義彦『資本論の世界』岩波書店，1966年。
- [22] 清水正徳『働くことの意味』岩波書店，1982年。
- [23] 竹内良知「マルクス主義哲学における実践の概念と人間の問題」『思想』1966年10月号。
- [24] A. シュミット，元浜訳『マルクスの自然概念』法政大出版局，1972年。
- [25] 杉原四郎『経済原論Ⅰ—「経済学批判」序説—』同文館，1973年。
- [26] 杉村芳美『脱近代の労働観—人間にとって労働とは何か—』ミネルヴェ書房，1990年。
- [27] 梅本克己『唯物史観と経済学』現代の理論社，1971年。
- [28] 戸木田嘉久『現代資本主義とME化』新日本出版社，1990年。

- [29] G. ルカーチ, 平井訳『若きマルクス』ミネルヴァ書房, 1958年。
- [30] 中岡哲郎「労働と人間」『講座 マルクス主義』4(人間)日本評論社, 1970年。
- [31] 塚本健「物化と自己疎外—労働疎外論の意義と限界—」『思想』1968年5月号。
- [32] 中岡哲郎『工場の哲学—組織と人間—』平凡社, 1971年。
- [33] F. エンゲルス「猿が人間化するにあたっての労働の役割」『マルクス・エンゲルス全集』第20巻, 大月書店, 1968年。
- [34] 山本広太郎「初期マルクスの『類の本質』について」『現代と思想』33, 1978年。
- [35] 丸山益輝『科学技術論—技術の内面からとらえた—』丸善株式会社, 1979年。
- [36] 内山節『自然と人間の哲学』岩波書店, 1988年。
- [37] 有尾善繁「初期マルクスの自然像」, 「マルクスの人間観」町田ノ有尾『現代科学と物質概念—対象性と自立性の弁証法—』青木書店, 1983年。
- [38] ア・ゲ・ムィスリフチェンコ, 岩崎訳『マルクス主義の人間概念』大月書店, 1977年。
- [39] 鈴木亨『実存と労働』ミネルヴァ書房, 1958年。
- [40] 永井潔『反映論と創造—芸術論への序説—』新日本出版社, 1981年。
- [41] 有尾善繁「マルクスにおける労働と人間—「自由の国」の理解をめぐる—」『現代と唯物論』1, 1973年。
- [42] 野地洋行「マルクスにおける労働概念の展開—「理念」から「労働」へ—」『三田学会雑誌』67-11, 1974年。
- [43] 野地洋行「初期マルクスにおける『理念』」『三田学会雑誌』61-12, 1968年。
- [44] 中川弘『『経済学・哲学草稿』と『ミル評註』—「疎外された労働」論を中心として—考察—』『商学論集』(福島大学)37-2, 1968年。
- [45] 大井正『唯物史観の形成過程』未来社, 1968年。
- [46] 宮本十蔵「カール・マルクスにおける『類』概念の展開」『科学と思想』10, 1973年。
- [47] 細谷昂『マルクス社会理論の研究—視座と方法—』東大出版会, 1979年。
- [48] トッフシェーラ, 宇佐美訳『初期マルクスの経済理論—資本本論成立前史—』(上)民衆社, 1974年。
- [49] 宮本十蔵「初期マルクス疎外論の検討」『科学と思想』3, 1972年。
- [50] マルクス, 杉原ノ重田訳『経済学ノート』未来社, 1962年。
- [51] 中川弘「唯物論的歴史観の形成と《パリ時代》のマルクス」『商学論集』(福島大学)40-2, 1971年。
- [52] 藤山嘉夫「初期マルクスにおける人間と社会—『経済学・哲学草稿』・『ミル評註』と方法視角の形成過程—」『社会学評論』107,

- [53] 湯田勝「『疎外された労働』の論理構造」『社会学研究』33,
- [54] 畑孝一「『経済学・哲学草稿』—市民社会の経済学的分析の第一次的形成という視角から（マルクス・コンメンタール）」『現代の理論』1971年4月号。
- [55] 松井秀親「『人間』・『社会』・『歴史』—史的唯物論の成立にかんする覚書—」『商学論集』（福島大学）30-2, 1962年。
- [56] I. メサーロシュ, 三階/湯川訳『マルクスの疎外理論』啓隆閣, 1972年。
- [57] 鈴木茂「『経済学・哲学手稿』における労働の概念」『現代と唯物論』1, 1973年。『唯物論と弁証法』文理閣, 1989年所収。
- [58] 島崎隆「弁証法における『否定』及び『否定の否定』の成立—『経済学・哲学草稿』におけるマルクスの方法を中心にして—」岩崎允胤編『科学の方法と社会認識』汐文社, 1979年。
- [59] 池谷寿夫「『人間の本質』とは何か」名古屋哲学研究会編『現代の哲学研究』合同出版, 1977年。
- [60] 鈴木伸一「<経済学・哲学草稿>における倫理的意義」『理想』402, 1966年。
- [61] 鈴木伸一「初期マルクスとフォイエルバッハ—『経済学・哲学手稿』をめぐる—」『法文論叢』（熊本大学）22, 1967年。
- [62] テ・イ・オイゼルマン, 森宏一訳『マルクス主義哲学の形成』第一部, 勁草書房, 1964年。
- [63] 望月清司「マルクス歴史理論の研究」岩波書店, 1973年。
- [64] 藤井光城「舟山信一教授著『人間学的実践論』についての批判的試論—特にく対立化→対象化としての実践—について—」『立命館文学』316, 1971年10月。
- [65] エム・イ・ペトロシヤン「人間の本質の概念」『新世界ノート』1966年6月号。
- [66] 広松渉『マルクス主義の成立過程』至誠堂, 1968年。
- [67] 似田貝香門「『経・哲』・『ミル評註』におけるマルクスのゲマイヴェーゼン論—その社会=歴史認識について—」『社会学評論』23-1, 1972年。
- [68] 似田貝香門「『経済学・哲学草稿』におけるマルクスの方法論の再検討—殊に『疎外論』における理念と科学—」『社会学評論』23-3, 1973年。
- [69] 似田貝香門「『疎外論』の方法論的意義—理念と科学—」『社会科学の方法』（御茶ノ水書房）, 1972年9月。
- [70] 芝田進午「人間にとって労働とは何か」『哲学』29号, 1979年。
- [71] 栗田賢三「マルクス主義における人間性の問題」『マルクス主義研究年報』1977年。合同出版。
- [72] 宮本十蔵「カール・マルクスにおける自然主義・人間主義の問題」『科学と思想』14, 1974年。
- [73] テ・イ・オイゼルマン, 服部/大谷訳『マルクスの『経済学・哲学手稿』』青

木書店，1976年。

- [74] 畑孝一「『経済学・哲学草稿』における対象化と疎外—大井正氏の「対象概念の二義性」及び「対象化＝疎外」について—」『商学論集』（福島大学）41-7，1974年。
- [75] 沢野徹「初期マルクスの経済学批判—『経済学・哲学草稿』第一草稿前後の市民社会分析—」『専修経済学論集』11-1，1976年。
- [76] 渋谷正「『国民経済学』批判の端緒的形成—『経済学・哲学草稿』＜第一草稿＞をめぐって—」『経済学』（東北大学）40-2，1978年。
- [77] 池谷寿夫「『人間の本質』と現実的個人—ドイツ・イデオログとマルクス＝エンゲルス—」『哲学』29号，1979年。
- [78] 赤羽裕「『批判』としてのマルクスの思想体系の方法的基盤」『思想』1969年6月号。